平成１９年８月の解説（週間天気予報）

【８月の天候状況】

上旬の初め台風第５号が九州から日本海を通り北海道に進んだため、西日本、北日本を中心に雨が降りました。その後中旬にかけては、ほぼ全国的に太平洋高気圧に覆われて晴れて暑い日が続きましたが、沖縄地方では台風や熱帯低気圧の影響を受けて、雨の日が多くなりました。下旬の初めと終わりは、前線が北日本から西日本にゆっくり南下したためほぼ全国的に雨が降り、中頃は高気圧に覆われて晴れました。

月を通しての日照時間は、北日本の日本海側で平年並、南西諸島では平年より少なく、その他の地方では平年より多くなりました。降水量は平年に比べて北日本から西日本にかけての太平洋側で少なく、東日本から西日本にかけての日本海側と南西諸島で多くなりました。気温は全国的に平年より高く、これまでの月平均気温の最高値を更新した観測地点もありました。

【８月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7 日目の平均）は全国平均では例年(注)より 4 ポイント高い 69%でした。沖縄地方では例年より 13 ポイント低く、北海道、関東甲信、北陸、四国地方では例年より 8 から 10 ポイント高くなりました。最高気温（2～7 日目の平均）の予報誤差は九州北部、九州南部地方で例年より 0.3 から 0.6℃小さく、全国平均は例年より 0.1℃小さい 2.3℃でした。最低気温（2～7 日目の平均）の予報誤差は中国、四国、九州南部地方で 0.3 から 0.4℃小さく、全国平均では例年より 0.2℃小さい 1.5℃でした。

（注）例年値は気象庁ＨＰ（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【８月の週間天気予報から】

8 月 22 日から 23 日にかけて、東北から九州にかけての広い範囲で雨が降りました。18 日に発表した東京地方の週間天気予報では 22 日、23 日の天気をともに「くもり」（降水確率はそれぞれ 30%と 40%）と予報しました。

図１は 18 日の予報で使用した 22 日と 23 日の予想資料です。22 日 21 時（図 1a）には樺太付近に低気圧があって、西日本にかけて気圧が低い部分が広がっています。23 日 21 時（図 1b）にはその低気圧はカムチャッカ半島付近まで進み、日本海の高気圧と太平洋の高気圧に挟まれた気圧が低い部分が日本の南岸に延びています。このことから、22 日から 23 日にかけて日本付近を前線がゆっくり南下すると予想しました。

前線が通過する際には雨が降り易くなりますが、通過する全ての地域で同じ様に雨が降るとは限りません。上空や地上付近の大気の状態や地形などによって雨の降り方は複雑に変わ

ります。

22 日、23 日の予想では東京地方は予想される降水域の端（図１）にあたっていることから、一部では降水があるものの広い範囲で降水になることはないと判断しました。

実際に前線はほぼ予想通り 22 日から 23 日にかけてゆっくりと日本付近を南下しました（図 2）。ところが東京地方では予想に反して 22 日の夜遅くに一部で雨が降った後、23 日の朝から昼にかけて広い範囲で雨が降りました（図 3）。

この事例のように前線が南下することが数日前からほぼ予想ができて、雨が降る可能性が大きいことは分かっていても、雨が降る範囲と時間帯を特定することは大変難しいことです。週間天気予報の降水確率が 40%や 30%の場合には、広い範囲で雨になる恐れもありますので、最新の予報で確認することをお勧めします。なお、降水確率が 50%以上と予想した場合は、天気予報文で何らかの雨表現（例：くもり時々雨、曇り一時雨等）をします。降水確率が 40%未満と予想した場合は、天気予報文では雨を表現しないことになっています。

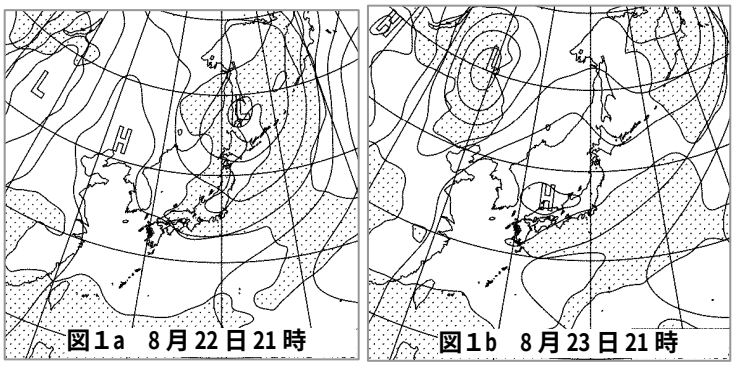

図１　8 月 18 日の予報で使用した 22 日と 23 日の予想気圧配置
ハッチのかかった領域は降水が予想される範囲

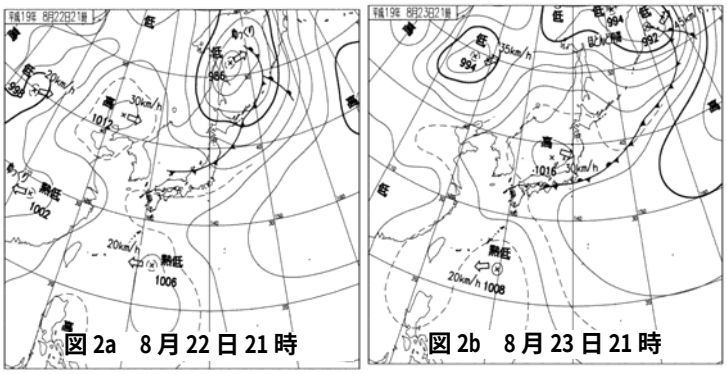

図 2　実況地上天気図

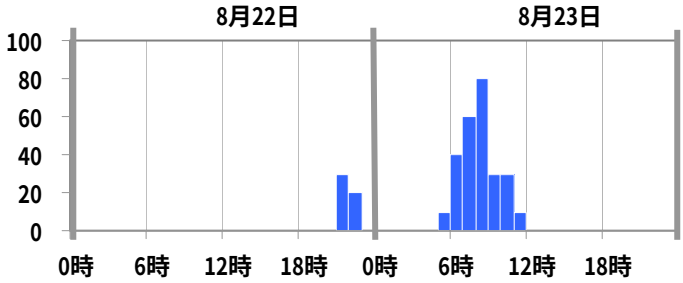

図3　東京地方の全観測点のうち1時間に1mm以上の降水を観測した観測点の割合 (%)

【１０月の週間天気予報の利用にあたって】

「秋の日はつるべ落とし」といいますが、太陽の照る時間が次第に少なくなって、秋から冬にかけて気温も急速に下がっていきます。10 月にはさわやかな秋晴れとなる日も多くレジャーなどで山に出かける機会も増えますが、北日本や標高の高い本州の山では雪が降ることもあります。標高の高い場所にお出かけの際には、天気予報で予想気温を確認するとともに山で雪が降るような予報が出ていないかを調べ、あらかじめ雪や寒さへの対策を考慮されることをお勧めします。